



近代中国における女性職業問題の討論について 金仲華を中心に

著者	楊 妍
雑誌名	国際文化研究
巻	25
ページ	33-49
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125418

近代中国における女性職業問題の討論について

—金仲華を中心に—

楊 妍

要 旨

本論では、『婦女雑誌』や『東方雑誌』（「婦女與家庭」欄）の編集長を務めた金仲華が、第1回「婦女回家（女は家に帰れ）」論争の中で、どのような立場に立っていたのかについて考察を試みる。最初、金仲華は女性の様々な責任を是認し、既婚女性も経済的に独立して社会進出すべきという主張を打ち出していた。しかし、『婦女雑誌』の主幹となった後、西洋の女性思想の影響を受けた金仲華は、当時の「育児」、「家事」などが女性の専業とされる風潮に反対し、女性が自活できる職業を持つことで、女性の社会地位も高まると主張するようになった。

【キーワード：「婦女回家」論争／女性職業問題／西洋女性思想／受容／社会進出】

一. はじめに

中国における「婦女回家」（以下：「女は家に帰れ」）を焦点とした論争¹は、現在に至るまでに全3回にわたって行われてきた。第1回は1930年代前半²、第2回は1940年代前半³、そして、第3回は1980年代前半に行われた⁴。これらの論争は、「いずれも単なる女性の生き方に関する議論ではなく、各論点の背景には各時期の政治、経済、社会状況と密接な関係を持つより大きな問題が存在する⁵」と考えられて、盛んに議論されてきた。

第1回「女性に家に帰れ」論争の口火を切ったのは、1933年9月13日『時事新報』に掲載された林語堂⁶の「結婚と女性の職業」という記事である。その中で林語堂は、現在の経済制度ではどの職業も男性に比べて女性が不利であること、唯一有利な「職業」は結婚であること、そして多くの中国の女性はこの職業に最も適している⁷と述べた。また、1936年に出版した彼の『My Country and My People』（『我国土・我国民』）では、結婚は女性を最も安全な環境を置き、女性の唯一の幸福に対する保証であり、母親になることは最大の権利であるとした。そして、中国女性は西洋女性の持つ自立した精神に欠け、離婚や再婚によっては幸福にはなれないとも論じられた⁸。その後、林の発言をめぐり『婦女園地』、『婦女共鳴』などの女性雑誌を中心に論争が展開されたが、日中戦争が勃発したことをきっかけとして1937年に議論は中断した⁹。

本論の執筆者は、この論争に参加し女性問題を討論したのは、女性知識人のほか、男性知識人もかなりの部分を占めていたことに着目した¹⁰。Lin Feng は中国における大部分の知識人は「文化的な批判家」と言えるとしており、その理由について、雑誌に投稿する知識人らは中国に影響を与えた社会問題を詳しく調査し、後の中国女性解放運動の後援を行っていたからであると述べている¹¹。

従来の研究では、近代中国における女性問題を討論される際に、林語堂、胡適、魯迅など五四時期の「代表的な男性知識人」の女性観及び女性思想に関する言説が扱われ、そしてこれらは男性知識人の見解として示されてきた。これに対して、1920年代以降、中国の雑誌や新聞などのメディアにおいて、これらの問題を中心に扱ってきた一般的な男性知識人その人ら自身に関する考察は余りにも不十分であると考えられる。また彼らの言説は、当時の中国社会には現れた様々な女性問題を考察する際に、どのような意義を持つのだろうか。

本稿で取り上げた金仲華¹²（1907年～1968年）は、社会活動家、出版翻訳者として有名であるが、他方、1928年、当時中国最大の出版社である商務印書館に入社し、『婦女雑誌』と『東方雑誌』において積極的に西洋の女性思想を導入し、また女性問題討論の重要性を提唱した¹³。その女性問題に関する論稿は非常に多く残されている¹⁴。

また、1934年2月には新生活運動¹⁵が開始した。この運動は、儒教思想を軸とし、国の為に戦って犠牲となるのを厭わない国民性を作りあげてを目的として実行された。その中で、「男は外、女は内」という伝統的な役割が強調され、特に女性に対して、従来の女性の持つべき道徳としてある「四徳¹⁶」の上に、さらに男性と同様に「忠孝仁愛信義平和¹⁷」の一般道徳も身に付けるべきと説かれるようになった¹⁸。このような社会的背景のもとで行われた「女は家に帰れ」論争では、「女性が子どもを産むことは社会の始まり¹⁹」、「結婚後の女性はまず家庭の主婦としての責任を果たすべき²⁰」などという主張をもっていた他の男性知識人らの発言と異なる金仲華の独自の主張を持っていたため、これを分析する必要がある。

『婦女雑誌』は近代中国女性雑誌史上最も刊行期間が長かっただけでなく、影響力や販売量においても首位を独占していた刊行物である。一方、『東方雑誌』は、45年にわたって発行された近代中国史上最大の総合雑誌である²¹。この二誌は常に女性問題の討論に力を注ぎ、強い影響力を発揮していた。1933年9月、林語堂の「結婚は女性にとって最も相応しい職業である」という発言が『時事新報』に掲載された後、女性問題をめぐって討論が盛り上がり、「女は家に帰れ」論争には多くの男性知識人によって加わり、大論争に発展した。金仲華も同年の12月に『東方雑誌』に記事を投稿し、自らの観点を主張している²²。

以下、小論では、女性職業問題に焦点を当て、『婦女雑誌』、『東方雑誌』及び金仲華の著作を材料とし、金仲華の女性問題に対する言論を考察した上で、「女は家に帰れ」論争の中での彼の立場について明らかにしたい。

二. 第1回の「女は家に帰れ」論争までの経緯

中国は長期にわたって儒教思想に支配され、「男尊女卑」「三従四徳」という封建思想が深く社会に根を下ろしていた。女性は生まれた時から低い地位に置かれ、「女は才能がないことが徳」、「男は外、女は内」など多くの制約が女性に課せられ、女性の日常の一挙一動に至るまで細かく儒教によって決められていた。

しかし中国の知識人は、西洋列強による半植民地化に対する危機感を抱くと同時に、世界の情勢

に注目し始める。その中で、梁啓超（1873年～1929年）ら一部の男性知識人は、諸外国における女性の自立と自律的な姿に啓発され、女性教育の必要性を主張した。彼らの目標とする女性像は、即ち「国家のために国民を生み出す責任を担う²³」女性であることを意味するのである。「良妻賢母」は、このような過程の中で賞揚されるべき女性像として登場した。

1910年代の中国の新女性像の代名詞が「良妻賢母」だったが、五四新文化運動を経て1920年代に入ると、更に変容が加えられた。すなわち、イプセンの「ノラ²⁴」に啓発された知識人は、女性の「人間」としてのあり方に立脚した新しい女性像を模索し始めた。ここにおいて女性は「独立した個人」となって、男性や家庭の「付属品²⁵」という立場から脱却することが求められるようになった。

その後、五四運動を経験した中国社会は、旧来の良妻賢母主義の打破が主張され、男女平等の教育、女性の経済的独立が『新青年²⁶』『新潮²⁷』『少年中国²⁸』などの雑誌を介して提唱されだし、女性の家庭外就業を推進する論調が急速に展開した²⁹。その理由としては、五四運動を経験した男性知識人らが女性を束縛する封建的な大家庭制度に着目し、欧米の職業女性の状況と比較することで、「職業女性の発達」の重要性という主張が展開されたからである³⁰。

そして1929年、中国社会は更なる大きな変化を迎えた。蒋介石の率いる南京国民政府が1928年6月に北京を占領して全国統一を果たし、続く1929年3月に所謂「訓政」が宣告された。国民党は、国民の生活と精神について統制を行うと同時に、女性教育の目標は「良妻賢母」の理念が復活し、「母性の特質の保持」、「良好な家庭生活と社会生活の建設」に力を入れるべきであると主張されるようになった。また、世界恐慌という社会状況下で、家庭外で生産活動に従事する女性に向けられたのは、男性の雇用機会を横取りしているという世論の目である³¹。そのため、女性は出産と育児を「天職」として家庭に戻るべきという理念が、当時中国のメディアで展開された³²。

その論争では、家庭において「良妻賢母」となることこそが女性の「天職」であり、国家、社会に貢献する最優先かつ唯一の道であるとする林語堂の提唱と、それに反対する意見との対立が激化していた。例えば林の記事が発表された3日後に、伊凡の「一女子の意見³³」という反論が『時事新報』に掲載され、同時期に『婦女共鳴³⁴』に載せられた「結婚を女子職業として認められるか³⁵」という記事もまた強い論調で林の主張を批判した。また別に、新文化運動以来軽視されてきた礼節を、新しく打ち立てる必要があると唱えた論客もいた³⁶。さらに、1935年には各雑誌や日刊紙で競って特集号が組まれ、女性の社会的活動と家庭の主婦としての役割をめぐって熱い討論が展開された³⁷。そして1936年に林語堂は執筆活動の拠点をアメリカに移し、また1937年の日中開戦によってやっとこの議論は終息した。これがいわゆる第1回の「女は家に帰れ」論争である。

三. 第1回「婦女回家」論争に関する先行研究

この論争についての先行研究は多数存在する。代表的な研究は前山加奈子の「林語堂と『婦女回家』論争—1930年に於ける女性論³⁸」や、江上幸子の「中国の賢妻良母思想と『摩登ガール』—1930年代中期の『女は家に帰れ』論争から³⁹」である。

前者は、「女は家に帰れ」論争の中で林語堂の女性に関する言論について考察した上で、林の思

想背景に触れた。また「女性の職業」に関しては、時代を超えた重要な問題として取りあげられ、以降の各論争中でも常に焦点となった⁴⁰。後者は、論争に表れた言説を四派——(A)：良妻賢母派(清末型)、(B)：新良妻賢母派(近代家族型)、(C)：新良妻賢母派(家庭・職業両立型)、(D)：賢母良母否定派(経済自立・社会変革型)に分類し、その言論から中国の「良妻賢母」思想及びそれに抵抗した人々のジェンダー観を探っている⁴¹。それによると、「良妻賢母」思想は単に「封建的」な一色のものではなく、しかし一律に「反動」の思想として切り捨てられるわけでもないという結論を導き出している。

以上の先行研究では、何れも論争それ自体の展開に着目しているが、論争に直接関係しないが、その影響を受けた中国の男性知識人の言論の形成に関する考察は少ないと言えるだろう。

また、夏蓉の研究では、第1回「女は家に帰れ」論争における男性知識人の言論を主に、以下のようまとめている⁴²。

- ① 家庭の管理、子女の養育など全ての家事労働が女性の「天職」である⁴³。
- ② 女性の家事労働は家庭に貢献すると同時に、社会への貢献にもなる⁴⁴。
- ③ 派手な都市のモダン・ガールにならないように、良妻賢母教育こそが女性を正しく導く⁴⁵。

ここでは、女性の家庭での役割を重視し、女性は家事と育児に専念することが望ましいとする男性知識人の意見が多く見られた。当時中国の世論と歴史的な世界情勢の下で、金仲華は女性職業問題に対してどのような見解を持っていたのだろうか。次の節で検討を行う。

四. 金仲華の女性問題への注視(1928年～1929年)

金仲華の女性職業観について論じる前に、まず彼の女性観の形成について考察したい。幼い時、金仲華は父親の書斎⁴⁶にある『幼学瓊林⁴⁷』という書物を手に入り、その中に書かれた「婦人は主に食事をつくり、ただ酒食衣服の札に仕えるのみ⁴⁸」という内容に憤慨し、その文章の上に赤い毛筆で「否否否」と書き加えたということから、女性問題に関心を寄せ始めたのはこの時期からであったのではないと思われる⁴⁹。彼が小学校に入った頃は正に辛亥革命が勃発した時期であり、共和革命の影響もあって、女性を抑圧する伝統的な儒教思想に反感を覚え、このような個人的な体験があったからこそ、金仲華は女性問題に着目するようになったことが考えられる。

金仲華が女性問題に本格的に取り組み出したのは、『婦女雑誌』の編集助手として参加した頃であった⁵⁰。1928年、21歳の金仲華は上海商務印書館に入り、『婦女雑誌』の編集長杜就田の編集助手を務め、編集方法を学んだ。杜就田が商務印書館を離れると、葉聖陶が編集長となった。金仲華は葉聖陶のもとでも引き続き編集助手を続け、彼の影響の下で、編集出版事業や女性問題により深い興味を持つようになっていた⁵¹。

1930年代初頭、中国の新生活運動が標榜した伝統的道德観や精神は、復古思潮を押し戻し、女性の役割を再び「家の内」に戻した。また、戦争によっても女性は新国民として、家庭から支援することが要求された。このようにして「女は家に帰れ」のスローガンや理想的な「良妻賢母」像が再び横行するようになった⁵²。

『婦女雑誌』の編集長である葉聖陶は、1930年3月（第17巻第3号）以降、商務印書館を出て、新たな刊行物の出版を始めた⁵³。金仲華は葉の後を引き継いで『婦女雑誌』の中心的人物となり、第15巻第10号（1929年10月）から執筆を始め、それ以降は世界の女性関連の記事を毎号2～3篇掲載している。

初めての金仲華の記事は、杜就田編集時期の最後の特集号「結婚前と結婚後」(嫁前與嫁後特輯號)である。本号の焦点は、近代家庭における結婚前後の女性の責任問題であった。「嫁前與嫁後應有的知識⁵⁴」（「結婚前と後に持つべき知識」）という記事の中で、女性の結婚前の時期には、①智識の訓練、②政治の趣味、③生産の技能という三つの能力を習得すべきと指摘し、結婚後の女性はさらに家庭教育を「盤石」にするために、直接子女に対して相当の責任を果たすことが求められた⁵⁵。そのため、結婚前後の女性の生理と心理上的変化について討論する必要があると、この特集号では述べられている。

朱秉国は「結婚後の女性は実質的に『良妻賢母』としての責任を免れることができない⁵⁶」ため家事や育児に最優的に取り組むべきと主張し、「家居婦人重要的職事」（「家居婦人重要な職業」）という記事では、女性の家庭内労働を①衛生、②教育、③道德、④管理、⑤財政、⑥雑務という6つの項目に分類した。すなわち結婚後の女性は食事の用意、子女の看護、人格の訓練、経済の管理、来客の応対なども一種の職業として、一定の期間はそれらに専念することが推奨された。

特集号「結婚前と結婚後」の記事には、以下のように記述されている（表1を参照）。

〔表1〕『婦女雑誌』1929年10月（第15巻第10号）：「嫁前與嫁後特輯號」

タイトル	日本語訳	著者
「嫁前嫁後應有的知識」	結婚前後に持つべき知識	朱秉國
「談々嫁事の本義」	結婚の本義を話す	文索
「女子嫁後の責任」	女性結婚後の責任	徐亞生
「嫁前與嫁後の生活概論」	結婚前後の生活概論	仲華
「嫁前與嫁後の戀愛問題」	結婚前後の恋愛問題	仲華
「嫁前の修養」	結婚前の修養	廖國芳
「嫁前和嫁後の心理變遷」	結婚前後の心理変遷	袁植隱
「馬爾德茵的嫁之研究」	マルティーンの結婚の研究	趙譽船
「女子の嫁之起因與變化」	女性の結婚する原因と変化	周敬庠
「女子出嫁前後生活的比較」	女性結婚前後生活の比較	許君可
「嫁前選擇配偶的標準」	結婚前に配偶者を選択する標準	庾生
「嫁の雜談」	結婚に関する雑談	葉曾駿
「嫁後小言」	結婚後の説教	挹奇
「女道婦道の商榷」	女道婦道の商榷	梨秋村女
「妻的責任」	妻の責任	宋孝璠
「婦女在家庭中的任務」	婦女が家庭の中にある任務	鏡影
「嫁後女子的國籍問題」	結婚後女性の国籍問題	仲華
「餘姚女子的嫁前與嫁後」	餘姚女性の結婚前と結婚後	紀芳
「育嬰的法則」	育児の法則	達如
「一位女畫家的嫁前與嫁後」	一人の女性画家の結婚前と結婚後	頌堯
「她嫁了後」	彼女が結婚した後	徐學文

以上を見ると、記事内容のほとんどは、「良妻賢母」は卑賤な精神性ではなく、大自然が女性に付与した特別な職業であり、結婚後の女性は全力で家庭に仕えることが、社会への貢献となると強調している⁵⁷。

また、1929年末、週刊誌『生活⁵⁸』上で活躍した教育専門家・陳選善（1903年～1972年）も、結婚前後の女性の職業について「結婚の準備する女子は、母という職業の準備をすべきである。結婚生活と職業生活は両立できないことはないが、二つの仕事に心を分散させるのは一つの仕事に集中するよりも効率が悪い⁵⁹」と主張した。ここで、当時の中国の男性知識人らは「女性が妻・母として家事労働に勤しむことは女の『職業』であり『自然』な分業である⁶⁰」という政治的なスローガン面の影響の下で、結婚後の女性は家庭において「天職」を果たすことを求めていることが確認できる。

一方の金仲華は、最初の「嫁前與嫁後の戀愛問題」（結婚前と結婚後の恋愛問題）という記事で、自由恋愛と自由結婚の重要性を唱えていた⁶¹。そして、もう一つ「嫁前與嫁後の生活概論」（結婚前と結婚後の生活概論）という記事の中で、結婚後の女性、すなわち妻の最も重要な責任について、以下のように説いている。

妻としての責任あるいは主婦の責任は古来より男は外、女は内という言説であり、その分業によって各自の責任を果たすことにある。現代は家庭分業によって弊害が生じ、協力して男女共に家を離れて仕事し、お互いに家計を負担しなければならない。しかし男女の天賦はそれぞれ分かれるとしても、女性の子を育む能力は決して男性が代行することではない。かえって女性を外に行かせて生計を分担することは責任が重く、女性の負担は余りに重すぎるのではないか？もし女性に損をさせられなければ、信頼性が高い保育機関を至急で求めねばならない⁶²。

このように、結婚後の女性の育児と家事の問題について、他の記事と異なるのは、金仲華が女性に「妻」と「母」としての責任がある点について認めているが、同時に女性は結婚しても経済独立して社会進出できるようにすべきと主張した点にある。さらに、結婚後女性は社会進出して職に就くことはできるが、出来れば彼女らの負担を軽減するために、信頼出来る子供の集団保育を担う保育機関を早急に設立すべきであると提唱した。

蒋介石による復古思潮推進・新生活運動と、それに歯止めをかけようとする陣営との対立のもと、当時の『婦女雑誌』編集長である杜就田が採用した『婦女雑誌』の編集方針は保守的であった。したがって金仲華が編集方法を、杜に学んでいた頃から、彼の記事内容から有形無形の影響を受けていたことは想像に難くない。かかる経緯から商務印書館に入ったばかりの金仲華は、『婦女雑誌』に載せられた最初の記事において、はっきりと自分の意見を打ち出すことができなかった可能性があるかと推測される。

しかし、金仲華の文章からは他の記事と異なる点が見出せる。彼は、(1)結婚後の働く多忙な女性

への同情と理解を示しながらも、(2)結婚した後の女性が家庭と職業を両立できない現状に対し社会にその解決方法を要求し、(3)他の記事にない「恋愛問題」を提起したのである。

その後、金仲華は『婦女雑誌』の編集主幹に着任したが、彼の発言はどのように変化したのだろうか。次の節で考察したい。

五. 『婦女雑誌』の編集主幹になってから停刊まで（1930年～1931年）

金仲華は23歳の時に、葉聖陶の推薦で『婦女雑誌』の編集主幹となった。彼は読者からの投稿を重視する編集であったため、若い知識人層から支持を集めていた。金仲華が書いた記事は、主として『婦女雑誌』に、世界各地の女性運動や女性の置かれた社会状況を紹介・解説する内容が多かった。彼が編集した時期の『婦女雑誌』は、女性教育・職業・婚姻・参政権など幅広い分野において大量の翻訳活動を行っていた。これは杜就田編集時期の『婦女雑誌』と比較すると、非常に大きく異なる点である。

これらの翻訳記事は当時の『婦女雑誌』において重要な位置を占め、ここから金仲華は新知識、新思想に触れながら近代の女性解放思想を醸成し、女性解放を実現するために努力を重ねていたことがわかる。

中でも、金仲華は単に著作をそのまま中国語に翻訳するだけではなく、雑誌の中で、マーガレット・ヒギンズ・サンガー(Margaret Higgins Sanger 1879年～1966年)⁶³、バードランド・ラッセル(Bertrand Russell 1872年～1970年)⁶⁴、ヘンリー・ハヴロック・エリス(Henry Havelock Ellis 1859年～1939年)⁶⁵、シャーロット・パーキンス・ギルマン(Charlotte Perkins Gilman 1860年～1935年)⁶⁶などの西洋思想家が論じている女性思想についての著作を取り上げた。その上で金仲華は簡潔な言葉で各章の内容を説明した上で個人的な見解も添えた。例えば、彼がラッセルの『婚姻と道徳⁶⁷』（『婚姻と道徳』）を紹介した際に、その選んだ理由を「今問題視されている婚姻制度と両性制度に対して不自然さと不徹底さを感じ彷徨したり苦悶したり人のため⁶⁸」であったと述べた。

しかし、金仲華はラッセルの著作中の「母性家庭」論には賛同していない。「母性家庭」論とは、母親になる女性固有の問題——つまり生命の生産に社会的な保障を与え、母性がこれまで負ってきた出産、育児を世の中で引き受けていくことを保証したという内容である。すなわち母性を母親となる女性の専業とし、彼女らが出産と育児に専念するためには、社会からある程度の保障を受けられるようにすべきであると主張している。

これに対し、金仲華は「母性家庭論では母性は婦女の専業であったが、婦女が解放された近代に至り、既に各種の職業界に入っている。私は彼女らが育児に専念としたがったとは信じられない⁶⁹」と述べている。

ラッセルの作品を紹介する以前、金仲華は『婦女雑誌』で数多くの女性解放思想を主題とした論説の紹介を行った経験があった。仲華は、欧米の女性解放家の著作から多大な影響を受けていたと考えられる。既に女性解放運動が行われていた欧米諸国は、女性解放の第一歩を、女性の社会進出から出発するものとしており、女性の職業教育に重点を置いていた。これに影響を受けた金仲華は

女性が自活できる職業を持つことで、これまでの社会の女性の能力に対する軽視を一掃し、女性の地位もこれによって高まると考えられる。

そして、エリスの『男與女⁷⁰』（『男と女』）を紹介した際には、本人自身もエリスと同様の意見を述べている。そして「婦女が家庭以外の仕事に従事することは必然的な趋向である。人類学によれば原始時代の婦女はかつて健全な体格で一切の工業に参加し、しかも一切の工業は婦女によって創始されていた。だから婦女の社会労働の分担も、昔から自ずと存在したのである⁷¹」と主張する。金仲華はエリスの「原始民族に於いて、狩猟と戦争は男の役割であり、家事と工業は女の役割である⁷²」という意見から影響を受け、女性が原始社会から男性と分業したとする歴史をふまえ、現代において女性が職業に就くこともまた必然的な成り行きであると考えていたのである。

また、彼はギルマンの『婦女與經濟⁷³』（『女性と經濟』）を紹介している。ギルマンはアメリカの作家であり、『女性と經濟』において「女性が一つの職業を持つべきであることをより適切に説明」した人物として知られていた⁷⁴。女性が職業を持つことについてそのメリットを「家庭外での作業によって、女性は健全な体格をもつことができ、強健な子女も産み出すことができる。家庭外で社会の人々と多く接触することは婦女の見聞を広め、知識を進化させ、思想を培わせ、そこから優良な後嗣を育成できる⁷⁵」ものと述べた。

『女性と經濟』においてギルマンは、女性の本来の性は男性に劣らないものであるが、女性が生存手段を男性に依存する「不自然」な関係を持つに至った、この「性による経済的關係」、「不自然」な関係が慣習化されたものが結婚制度だと指摘した⁷⁶。そして、このような「不自然な」経済的な関係から脱するために、「働く母親」が重要であり、これが理想的な女性像であるとギルマンは主張した。金仲華もギルマンの「家事労働から解放され、『人間』として目覚めた女性が仕事に従事すべき⁷⁷」ことに賛同し、「この著作を紹介するのはさらに女性の読者らの努力をうながし、職業の範囲を拡大し、独立のための基礎を打ち立てる⁷⁸」ことにあるとして、女性の職業の重要性を強調したのである。

1920年代から1930年代前半にかけて、『婦女雑誌』はラッセル、エリス、ギルマンら西洋女性の思想を翻訳して紹介することで、これらの議論はより活発に展開された。金仲華がこのような行動を出したのは、女性に対して家庭内の役割より、社会的な役割を果たすことに期待していたと読み取れる。また多くの読者もこれらを引用し、女性の職業問題を真剣に議論し始めるようになっていたことが分かる⁷⁹。以上のような観点を持つ金仲華は、第1回「女は家に帰れ」論争の中でどのような立場に立ったのであろうか。次節で述べることにしたい。

六. 『東方雑誌』への編入と離別（1932年～1934年）

1932年、商務印書館は戦火に遭い『婦女雑誌』は停刊に陥る。その後、『東方雑誌』が「婦女と家庭」欄⁸⁰を新設することで、『婦女雑誌』で行われた議論の舞台はここに移行された。金仲華は「婦女と家庭」欄を設置した当初の第29巻第4号から、商務印書館を辞職する第31巻第13号まで、2年半に渡って編集長を担当、殆どの記事を手掛けていた⁸¹。

その中の一つ、1933年の1月1日掲載の記事「中国女性往何处去」（「中国女性はどこへ行く」）の中で、金仲華は中国女性に対し、以下のように述べている。

経済の困窮、建設の荒廃、文化の衰退、これらに少しでも心あたりのある人であればこの現象にある危機を感じている。生活を家事に消耗していた婦女でも、これらの影響を感じている…かつて数年来、ある人は婦女が家庭の中に帰るべき、家庭を整える良妻賢母になるべきだという主張があった。また、ある人は婦女が以前よりさらに大体的に社会生活に参加すべきと熱烈に主張した。同時にある人は、婦女は積極的に政治に参加して家庭・社会・政治により多く寄与すべきと主張した。そしてほかに示された道は沢山あるが、中国婦女はどちらの道に進むべきであろうか？⁸²

この文章からは、女性の力は国家・社会にとって必要だという認識の下、中国の現状が政治経済において危険な状態にあり、社会文化的側面に対しても非常に危機感を持っていたことが述べられている⁸³。この時期の金仲華の女性問題研究の特色は、一つの問題に限らず、戦争の影響と経済の危機により1930年のはじめの中国が深刻な不況に陥っており、中国女性の運命を国家興亡という大きな方面から扱う、すなわち女性解放を救国と結びつけて論じていた点にある。

1934年9月、金仲華のこれまでの女性問題研究の集大成である著作として『婦女問題的各方面』（『婦女問題の各方面』）が開明書店によって出版された。この著作の内容は、女性問題に関する記事を婦女の思想・経済・性愛・参政そして教育問題と分けたものである（表2を参照）。

〔表2〕『婦女問題的各方面』目次

タイトル	初出掲載誌	コードナンバー
「婦女的生活形態與思想」	『東方雜誌』 1933年4月1日	第30巻第7号
「近代婦女解放運動在文学上の反映」	『婦女雜誌』 1931年7月	第17巻第7号
「从家庭到政治」	『婦女雜誌』 1931年5月	第17巻第5号
「从職業回到家庭么」	『東方雜誌』 1933年12月1日	第30巻第23号
「婦女勞動問題之生物學的觀察」	『東方雜誌』 1932年10月16日	第29巻第4号
「家事社会化」	『東方雜誌』 1932年11月1日	第29巻第5号
「我国婦女知識解放運動的檢視 ⁸⁴ 」		
「我国新婦女与婚姻糾紛」	『東方雜誌』 1932年10月16日	第29巻第4号
「目前我国的婦孺保護問題」	『東方雜誌』 1933年5月1日	第30巻第9号
「托兒所与嬰兒院之理論的基礎」	『東方雜誌』 1933年9月1日	第30巻第17号
「禁娼与公娼」	『東方雜誌』 1933年7月1日	第30巻第13号
「節制生育與婦人生理的解放」	『婦女雜誌』 1931年9月	第17巻第9号
「世界婦女奴隸現状」	『婦女雜誌』 1930年8月	第16巻第8号

ここでは金仲華の『婦女雜誌』と『東方雜誌』における代表的なものを収録しているが、『婦女雜誌』に掲載された「嫁前與嫁後的生活概論」（「結婚前後の生活概論」）という最初の記事は選ばれていない。その理由は恐らく当時の『婦女雜誌』全体の方向性を鑑み、金仲華のこの記事は1934年現在の自身の考え方と大きく食い違うため、意図的に選択しなかった可能性が考えられる。

例えば第1回「女は家に帰れ」論争は1933年9月に発生したが、この際、金仲華は1933年12月の

『東方雑誌』に「從職業回到家庭嗎⁸⁵」（「職業から家庭に戻るか」）という記事を發表した。蒋介石が1934年2月に南昌で始めた「新生活運動」という政策に影響を受け、金仲華はその現状に対して疑問を持ったのである。彼が明確に「婦女の社会進出は抑えられない」とする自分の信念を持ちながらも、「①婦女を家庭に帰るべきとして抑えつけた者はいかなる動機によってそのように言ったのか？ また②婦女は現在の職業界においてどのような地位に立っているのか？」⁸⁶という読者からの質問に対して、それぞれ回答しているので、簡単に紹介したい。

当時の社会経済の状況は、女性の就業を制限することで男性失業者の労働の機会を増やし、軍事力の基盤となる人口を増加させようとする傾向があった⁸⁷。そのため金仲華は、人口を増加させる方法は必ずしも女性を家庭に帰らせるだけではないし、したがって女性だけが家事と育児の全責任を負うべきだとは言えないとした。即ち男性にも家事や育児の責任があると論じた。

二つ目の問いに対する回答は以下のものであった。いわく、多くの職業の中で、「花瓶⁸⁸」を除く大部分は女性工場労働者によって営まれている。それゆえ「社会への貢献のために職業に服務する女性」たちは、「花瓶」を反面教師にして努力する必要があったと唱えた。また、女性工場労働者の多くは家族の生計を担う必要があるため、必死に自らの家族の生活費を稼いでおり、その彼女たちこそが労働者の業界で重要な地位を占めていたと金仲華は回答した。

ここで、金仲華が「女は家に帰れ」論に反対する理由は二つあったと考えられる。一つは女性を家庭に帰らせても、戦争と経済による人口減少の問題を解決できるわけではない点である。もう一つは、職業を持つ女性が社会で重要な地位を占めていることから、女性を社会の「一員」とすることを保証する点である。働く女性の重要性は家庭の生計を負担するだけでなく、「社会への貢献」を反映していると金仲華が認識していたのである。

1935年以降になると、金仲華の女性問題に関する発言は少なくなる。彼の著作『婦女問題の各方面』を見るとその理由が明らかである。それによると半分は多忙のためであり、もう半分は「女性問題について話すべきことは既に話し終えた⁸⁹」ためである。最初金仲華は女性問題を女性だけの問題としていたが、その後、当時の様々な社会問題の一つにこの問題が属していたことを、彼は示した。これは、婦女問題を軽視しているわけでも、もしくは解決したと考えたわけでもなく、他の社会問題と合わせて解決方法を求めるべきだと金仲華が考えるようになったからである⁹⁰。即ち、女性は他の被圧迫者と同様であり、重要なのは圧迫される根源となった封建社会を批判することであると意識した点にある。

1932年1月28日、日本軍の爆撃により商務印書館が被爆したことを機に、『婦女雑誌』はそのまま停刊となり、編集長とした金仲華も暫く失業していた。これを契機として彼は国際政治問題に対して関心を抱き研究を始めた⁹¹。1934年に金仲華は商務印書館から離れ、胡愈之（1896年～1986年）と共に『世界知識』という政治雑誌を創刊したことで、以降は時事を中心とした政治経済へと関心を移行していったのである⁹²。

七. 終わりに

女性の経済的自立については、19世紀末に梁啓超らが、国家の富強という目的意識から討論したことに端を発する。民国期に入る頃には、女性の家庭外就業の是非が、活発に討論されるようになった。しかし、1920年代後半からは、失業者の増加や蒋介石による「新生活運動」を背景として、専業主婦を擁護する論説が目立ち始め、その賛否を巡って論争はさらに展開された。

本論では、金仲華を研究対象として、商務印書館に入社したばかりの言論が辞職した頃と比較し、彼の女性職業問題に対する論説がどのように変化したのかについて分析した。そのため、第1回の「女は家に帰れ」という論争の中で、彼がどのような立場に立ったのかについて考察を試みた。

金仲華は女性問題を論ずる際、その解決方法として公育機関を設立することを要求するとともに、『婦女雑誌』の編集主幹になってからは、幅広い分野で西洋の女性思想を翻訳しラッセル、エリス、ギルマンらの作品を紹介した。女性が職業を持つことは必然的であること、またそのためには健全な公育施設の設立が急がれること等々を提唱したのである。

これらの⁹³著作の紹介と翻訳を通して金仲華は、中国女性の社会的地位への理解を深めるとともに、西洋文献における女性解放思想に影響を受け、『東方雑誌』『婦女と家庭』欄の編集長にもなった。それまでの中国では、育児などの家事は女性の「天職」と認められていたが、金仲華はこれには男性即ち父親の参与も必要であると提唱しているが、これは彼の編集助手時期に示した「母性を男性は代行できない」という考えに反している。この提案は、恐らく『婦女雑誌』の編集時期に行った西洋の女性解放思想の翻訳に影響を受けた証とも考えられる。

以上のことを鑑みると、家庭の事情は女性だけの責任ではなく、男性及び社会にも責任があることを主張した金仲華は、これまでの論争に一石を投じたと言えるだろう。ただ、労働女性の労働環境及び賃金低下など問題については、彼の視野に入っていなかった。1920年代から、男性知識人らが中国女性を「新式女性」と「旧式女性」に分け、「新式女性」は「知識を持って解放の能力を有する」女性である一方、「旧式女性」は「自ら解放への覚悟と能力を持っておらず、あくまで解放される位置にいる」女性と称する⁹⁴。例えば、『婦女雑誌』の内容をみると、当時、知識を持っていた「新式女性」に着目することに力点を置いていたように思われる。つまり金仲華は女性職業問題を取り上げた際に、「旧式女性」と目された労働女性の苦境について無視していたのではないかということが推測できる。

中国の女性解放における長足の進歩、「纏足」からの解放や経済的独立の唱導は、一定の大きな成果を得て実現された。しかし、1930年代に入ると、その貴重な成果の一つである女性就業の権利は剥奪されようとしていた。こうした現実に応じて展開された「女は家に帰れ」論争において、論客らが単に「男は外、女は内」という性別役割分業への復帰を提唱しただけではなく、儒教の倫理によって支えられた中国独自の男尊女卑や性差別に批判を加えることとなった。小論では、この論争に参加した金仲華の言論を手掛かりとし、彼が西洋女性思想から影響を受けてどのような独自の言論を生み出したのかを究明した。こうした先進的な思想が合流して産生された新たな言論だからこそ、中国女性解放運動に新たな局面を付与することができたと考えられる。

紙幅の都合から、小論では、金仲華に論点を絞って考察したが、残されていた課題は少なくない。今後は彼の女性観が1930年代以降の『東方雑誌』編集者にどのように継承され、修正されて行くのか、論客の言論と対照しつつ分析を試みたい。

註

- 1 1930年代における女性解放をめぐる論争は、「婦女回家」論争以外、「ノラのその後」の女性職業論争、「新良妻賢母」主義論争があって、いずれも女性と家庭・社会との関係について討論がなされた。
- 2 1933年9月13日、上海『時事新報』に掲載された林語堂（1895年～1976年）の「嫁入りと女子の職業」は第1回の「婦女回家」論争のきっかけになった。その記事には、女性の唯一男性と競争しえない職業は結婚だけであると示されていた。すぐに、『婦女共鳴』の記者が「嫁入りは女性の職業と言えるか？」という記事で林の主張に反駁した。最後に「これが林氏個人的な論調ですが、現代社会でこのような観念を持っている人は少なくないので、本当にいい現象ではない」と述べているところから、女性が家庭に入り、良妻賢母となることを提唱する意見が当時非常に多かったという社会状況がよく分かる。例えば、李賦京が「女性が子供を産むことこそ、社会の始まりであり…それ以外の全ては重要ではない」と述べた。このように、「女性が職業を就くべきか、家庭に戻るべきか」をめぐる論争が展開されていた。さらに、「女性は職業と家庭を両立すべき」という新しい意見も現れた。知識人間の討論がますます激しくなっていく中で、1936年の『婦女共鳴』に「女性解放は単に職業の取得だけではなく、社会全体的な解放である」と提唱した知識人もいた。ここから、論争の中心が徐々に封建社会の根本的な男女不平等制度の根絶に移行したことが分かる。後の1937年になると、日中戦争が勃発し、中国女性を家から出て戦争協力に参加を要求されるようになったため、第1回目「女は家に帰れ」論争は終息した。
- 3 1940年初、日本軍が中国の東北、華北地区に侵略し、中国の経済に深刻な衝撃を与えた。中国の女性職員を採用した企業は大量に女性職員を退職させ、知識女性の不満を引き起こした。第2回の「婦女回家」のきっかけは、1940年7月6日、重慶の『大公報』に掲載された端木露西（1912年～1998年）の「蔚藍中一點々暗淡」（「青色の中の一つの暗点」）という文章であった。彼女が「現代の社会制度の下で、どの階級の女性でも90%は結局家庭で主婦、母親になる」と述べた。ついで「女性は家庭に戻って良妻賢母になるべし」と主張した。この文章が発表された後すぐ論争が起こった。喻培厚が『大公報』に「女性の独立に最も重要なことは独立心を高め、他人に頼らないことである」と述べた。また、枸杞は、端木の観点を批判し、女性は男性と同様に国家と民族の解放に奉獻すべきと主張した。さらに、当時共産党の婦女委責任者であった鄧穎超は「端木氏の願ったように女性解放が逆に女性の一つの小家庭に帰し、狭い意義での良い母親になり、一つ家庭に満足するようではいけない」に反論として「女性は家を出て戦争に身を投じるべき」という主張が大きく取り上げられた。この一連の論争は1回目の論争より、女性の社会進出を民族解放と同程度の問題として扱うものが多いことが見受けられる。
- 4 20世紀80年代、「女は家に帰れ」論争が展開され、その契機としては『中国婦女』に「夫婦二人が働くよりは、一人だけが働き業績をあげた方が効率的だ」という主張があったが、すぐ中華婦女連合会などから反論を受けた。3回目の「女は家に帰れ」論争の特徴は、家庭と仕事の二重負担により、女性は経済的、社会的価値を実現するために、男性より更に力を尽くして犠牲を払うことを求められた点にある。
- 5 前山加奈子、「林語堂と『婦女回家』論争—1930年代に於ける女性論」、『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』、汲古書院、1993年、509頁。
- 6 林語堂（1895年～1976年）：福建省出身の文学者、評論家である。牧師の父親を持ち、上海の聖約翰大学を卒業。アメリカとドイツに留学。北京大学・厦門大学の教員を経て、雑誌や新聞に寄稿するかたわら自分でも雑誌を編集、刊行した。

- 7 原文「出嫁は女子最好、最相宜、最稱心的職業」、初出林語堂、「婚嫁與女子職業」、『時事新報』（1933年）、中華全国婦女聯合会、『中国婦女運動史（新民主主義時期）』、春秋出版社、1989年、341頁。
- 8 中国語訳に『吾国与吾民』（1937年出版）、日本語訳は新居格訳『我国土・我国民』（1938年出版）がある。ここでは日本語訳を用いた。林語堂著・新居格訳、『我国土・我国民』、豊文書院、1938年、236～237頁参照。
- 9 臧健、「十、『婦女回家』：一個關於中國婦女解放的話題」、遊鑑明等主編、『共和時代的中國婦女』、左岸文化、2007年、371頁。
- 10 同注9、臧、366頁。
- 11 Jin Feng、「The new woman in early twentieth – century Chinese fiction」、『Comparative cultural studies』5、Purdue University Press、2004年、28頁。
- 12 金仲華は1907年に浙江省桐郷県に生まれ、孟如、仰山などのペンネームを用いている。1928年春、金仲華は商務印書館に入社した。最初『婦女雜誌』の助手であった仲華は、編集長である葉聖陶が辞職後、フランス留学を経験した女流作家である楊潤余（1902年～？）とともに編集作業の中心的存在となった。しかし、1932年上海事変の戦災で商務印書館の建物が被害を受けた後、『婦女雜誌』の再刊はなく、『東方雜誌』の「婦女と家庭」欄（1932年10月第29巻第4号から）に統合される形で、金仲華が編集を継続していた。（楊潤余の生没年について、生年は1902年であるが、没年は未詳である。）
- 13 葉聖陶が『婦女雜誌』の編集長を辞めた後、楊潤余が編集長になったと掲載されているが、金仲華の年齢などから楊を名義上の編集主幹としたものと考えられるが詳細は不明である。前山加奈子、「女性定期刊行物全体からみた『婦女雜誌』」、「『婦女雜誌』からみる近代中国女性」、村田雄二郎編、研文出版、2005年、385頁。
- 14 金立勤、「金仲華の編輯生涯」、『新文化史料』、中国文化報、1998年。
- 15 新生活運動：1930年代に蒋介石が開始した生活様式と社会倫理の改進黨運動である。
- 16 「四徳」：女性の持つべき「婦徳、婦容、婦言、婦功」という四つの徳である。
- 17 蒋介石、「新生活運動中婦女應有的知識」、『新生活運動須知』、新生活叢書社、1935年、85頁。
- 18 陳暉、『近代化と中国女性の生き方—中国近・現代女性史として』、城西国際大学国際文化教育センター、1999年、85頁。
- 19 李賦京、「無論如何女子總是女子」、『国聞週報』、第12巻第9期、1935年3月11日。
- 20 蔡悟、「嫁後婦女的職業問題」、『婦女共鳴』、第2巻第4期、1933年4月。
- 21 寇振鋒、「中国の『東方雜誌』と日本の『太陽』」、『メディアと社会』（1）、2009年、7頁。
- 22 孟如、「從職業回到家庭嗎」、『東方雜誌』第30巻第23号、1933年12月1日。
- 23 姚毅、「中国に於ける賢妻良母と女性觀の形成」、『論集中国女性史』、吉川弘文館、1999年、120～122頁。
- 24 ノルウェーの劇作家であるヘンリック・イブセン（1828年～1906年）によって書かれた戯曲「人形の家」の主人公である。内容は、裕福な家庭の主婦のノラが、病気の夫のために無断で借用証書を偽造して金を借りていたことが、夫にばれてしまうことから始まる。夫ヘルメル態度から、ノラは実は今まで自分がおもちゃのように遊ばれていただけのことを悟り、自立した真の人間として歩き出すために、夫と子供を捨てて家を飛び出してしまふ。1879年夏にイタリアで書かれたこの戯曲は、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアなどヨーロッパ全域にわたって空前のセンセーションを巻き起こした。さらに、このような「ノラブーム」はヨーロッパに限らず、20世紀の東アジアでも大きな反響を呼び寄せられた。許慧琦、『「娜拉」在中國：新女性形象的塑造及其演變（1900S～1930S）』、国立政治大学歴史学系、2003年、73頁。
- 25 陳延媛、『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』、勁草書房、2006年、222頁。
- 26 梁華蘭、「女子教育」、『新青年』、第3巻第4号、1917年6月。
- 27 李大釗、「聯治主義与世界組織」、『新潮』、第1巻第2号、1919年2月。
- 28 李大釗、「婦女解放与 Democracy」、『少年中国』、第1巻第4期、1919年10月。

- 29 岩間一弘、「家庭・職業・革命—兩大戰間の中国における都市中間層の女性をめぐって」、村田雄二郎編、『「婦女雜誌」からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、51頁。
- 30 例えば、三無、「婦人職業問題之学説及批判」、東方雜誌社、『東方雜誌』第17卷第10期、1920年5月。Y. D、「職業与婦女」、『婦女雜誌』第7卷第11号、1921年11月。
- 31 江上幸子、「第12章 中国の賢妻良母思想と『モダン・ガール』——1930年代中期の『女は家に帰れ』論争から」、『東アジアの国民国家形成とジェンダー—女性像をめぐって』、青木書店、2007年、279頁。
- 32 中国女性史研究会編、『中国女性の一〇〇年』、青木書店、2004年、292頁。
- 33 尹凡、「一女子の意見」、『時事新報』、1933年9月16日。
- 34 『婦女共鳴』は1929年に「婦女共鳴」社より上海で刊行した機関誌である。1944年に廃刊した。
- 35 談社英、「婚嫁能算女子職業嗎?」、『婦女共鳴』、第2卷第9号、1930年9月。
- 36 例えば、李賦京、「無論如何女子總是女子」、『國聞週報』、第12卷第9期、1935年3月11日。家為、「廣東重視『賢妻良母』教育」、上海『申報』、1936年4月22日。
- 37 論争が拡大された1935年11月、上海の『婦女共鳴』が「新賢良」という特集号を出し、家庭での女性役割を重視すべきかどうかを巡って討論された。
- 38 同注5、前山、509～525頁。
- 39 同注31、江上、279～298頁。
- 40 同注5、前山、523頁。
- 41 江上の研究によれば、A派発言の特徴は、「男は外、女は内」というように、家内の全てを女性が処理すべきであるとする。B派発言の特徴は、結婚後の女性は良妻賢母、家事、産児の三責任を果たしてから社会に出るべきであるとしている。C派発言の特徴は、家庭内の女性役割を重視しているが、女性を家庭内に限定しようとするものでは決してなく、社会での役割、経済自立との並行が必要としていたことにある。D派発言の特徴は、家庭から出て、労働女性の解放、男性中心の私有財産社会制度の改造及び民族の独立運動の三つの面に尽力することを強く主張したということにある。同注31、江上、279頁。
- 42 夏蓉、「20世紀30年代中期關於「婦女回家」與「賢妻良母」的論争」、『華南師範大學學報科學版』、華南師範大學、2004年6月、41頁。
- 43 例えば、李賦京、林語堂はこの種類に属する。李賦京、「無論如何女子總是女子」、『國聞週報』、第12卷第9期、1935年3月11日。林語堂、「婚嫁與女子職業」、『時事新報』1933年9月13日。
- 44 例えば、『申報』の編集長である周瘦鵬はこの種類に属する。周瘦鵬、「發刊辞」、『申報』副刊『婦女專刊』第1期、1936年1月1日。
- 45 例えば、何子恒はこの種類に属する。何子恒、「中国女子教育之商榷」、『晨報』副刊『星期評論』、1935年9月8日。
- 46 金仲華の父親の金匯芳は清朝の秀才に合格し、自宅において私塾を開いていた。鄭彭年、『宋慶齡和她的助手金仲華』、新華出版社、2001年、25頁。
- 47 『幼学瓊林』：中国古代において児童向けの啓蒙用読み物と言われる。編者は明末の程登吉であると一般的に考えられている。
- 48 原文「婦主中饋、惟事酒食衣服之禮…何爲三從?從父、從夫、從子」、程登吉(原作)、胡遐之(校訂)『幼学瓊林』、岳麓書社、1986年、73頁。
- 49 同注46、鄭、33頁。
- 50 原文「我開始留意婦女問題是在民國17年進入婦女雜誌社的時候，因為職務的關係我陸續收集了一些關於婦女的資料、同時對於國內外婦女運動的進展狀況，也很爲關切。」金仲華、前言『婦女問題的各方面』、開明書店、1934年、1頁。
- 51 同注46、鄭、58頁。

- 52 新生活運動が始まる前の1929年に、世界的な経済恐慌によって引き起こされた失業者の激増問題を解決するために、ドイツでは女性に家庭に戻り、職場を男性に譲り渡すよう強要した。中国はドイツと同様に、失業者を救済するために、女性の役割を「家の内」に返すことが要求された。また、抗日戦争によって、女性も新国民として家庭にあって後方支援することも求められた。同注32、中国女性史研究会、136頁。
- 53 葉聖陶は総合雑誌の『生活週刊』を刊行し、出版事業を行う生活書店を設立した。
- 54 原文「『嫁前』與『嫁後』實有提出特別討論之必要、而婦女雜誌發行『嫁前與嫁後』專號委實是有重大的意義與價值」、朱秉国、「嫁前與嫁後應有的知識」、『婦女雜誌』第15卷第10号、1929年10月。
- 55 同注54、朱。
- 56 原文「女子在嫁後實不容辭她的『賢妻良母』的責任。」同注54、朱。
- 57 原文「據我個人的意見：以爲女子最好先將家政料理完美爲社會建築一個堅固美好的基礎、然後再出其所學、從事其他服務社會的工作、須知處理家政、也是一件服務社會的重大工作啊」宋孝璠、「妻的責任」、『婦女雜誌』第15卷第10号、1929年10月。
- 58 『生活』：1925年10月上海に創刊され、1926年10月から鄒韜奮（1895年～1944年）が編集長となった。
- 59 原文「我以爲結婚的生活與職業的生活并非不能并存的、不過分心與兩種工作當然比專心於一種工作的效率小些。」、陳選善、「婦女解放思潮引起的問題」、『生活』第5卷第1期、生活週刊、1929年12月1日、28頁。
- 60 白水紀子、「中国における「近代家族」の形成：女性の国民化と二重役割の歴史」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要。Ⅱ。人文科学』、2004年、145頁。
- 61 自由離婚に対しては、中国女性の自立と職業が西洋女性と比較すると社会的な差が大きいため、離婚後の種々の生活苦難の発生と人生が不幸になる可能性を考慮し、離婚には大変慎重に考えるべきだと強調した。仲華、「嫁前與嫁後の恋愛問題」、『婦女雜誌』第15卷第10号、1929年10月。
- 62 原文「爲妻的責任或主婦的責任古語有男治外女治內之說、這是因分工而各負責而在現代以家庭分工制積久生弊將改弦易轍而爲合作、則男女共須出外離家互相負擔經濟、但是男女的天賦不同在女的一方面孕育子女決非男子可以代行的、而反要她加重了出外謀生的肩責、這不是女的一方所負太重麼？如果不使女的一方吃虧非急須謀一極可靠的公育機關不可」、同注61、仲華。
- 63 華君、「山格夫人提倡節育的近著」、『婦女雜誌』第16卷第9号、1930年9月。サンガー夫人（山格夫人）アメリカの産児制限活動家であり、優生学のある側面における唱導者である。
- 64 仲華、「羅素的『婚姻與道德』」、『婦女雜誌』第16卷第11号、1930年11月。ラッセルは現代イギリスを代表する思想家である。数学者、論理学者、平和主義者として活躍していた。ラッセル家は代々、「貴族的自由主義」をもって鳴るイギリス貴族の名門で、祖父ジョン・ラッセルは、ヴィクトリア女王に仕え、自由党を率いて2回首相となった。パートランド・ラッセル（著）、安藤貞雄（訳）、『結婚論』、岩波書店、1996年、344頁。
- 65 金仲華、「韋理斯的『男與女』」、『婦女雜誌』第17卷第2号、1931年2月。ヘンリー・ハヴロック・エリスはイギリスの性科学者で性の研究に行われた。
- 66 金仲華、「居爾門夫人的『婦女與經濟』」、『婦女雜誌』第31卷第3号、1931年3月。アメリカの女性解放思想家、評論家、作家。著作『女性と經濟』（1898年）がベストセラーとなり、20世紀初めには重要な思想家として評価された。
- 67 『婚姻與道德』：原名『Marriage and Morals』、1929年出版された。中国訳は『婚姻革命』、訳者は野盧、世界学会によって1930年に出版された。
- 68 原文「在一般感覺到目前婚姻制度與兩性道德的不自然不徹底而徬徨苦悶的人讀了羅素這冊書會得到許多有益的提示。」同注64、仲華。
- 69 原文「母性家庭將使母性成爲婦女的專業、在婦女解放的現代、婦女已走入各種職業界、我不相信她們再願意以生育子女爲專業。」同注65、金仲華。

- 70 『男與女』：原名『Man and Woman: A Study of Human Secondary Sexual Characters』（『男及び女：人間に於ける第二義の性的特徴の研究』）、1894年出版された。小倉清三郎によれば、「性的特徴には第一のものと、第二義のものがある。直接に生殖に関係する器官及び作用が第一義のものとせられ、その他が第二義のものとせられてある。」小倉清三郎訳、『世界女性学基礎文献集成』（「明治大正編」第14巻）、初版1913年、再版2001年、2頁。
- 71 原文「然而婦女的從事家庭以外的工作已成為必然的趨勢。就人類學講原始的婦女曾以健全的體格參與一切的工業、并且一切的工業都是由婦女所創始的。所以婦女的擔任社會的工作也未始有昔乎自然。」同注66、金仲華。
- 72 原文「在原始的民族中大概游獵和戰爭歸於男子、家事和工業屬於女子。」同注66、金仲華。
- 73 『婦女與經濟』：原名『Women and Economics』、1898年出版された。ギルマンが女性の経済的自立と「母性」の関係をどのように論じたかに焦点に当てたものである。結婚後子供を産んだギルマン自身も「家庭性」の美德という圧迫の中で苦しみ、女性が経済的男性に依頼する関係から脱するために、家事労働の社会化を彼女は主張した。出産と子育てを神聖な女性の天職と考えていたスウェーデンの思想家であるエレン・ケイに対し、ギルマンのような考えを「母性のかけらもない」フェミニストとして非難した。
- 74 村田雄二郎編、『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』、研文出版、2005年、55頁。
- 75 原文「在家庭外作工活動可以使婦女發展健全的體格產生強健的兒女在家庭外多和社會人群接觸可以使婦女見聞廣博知識增進思想開豁而培養出優良的後嗣」同注63、華君。
- 76 『婦人と経済』、ギルマン著、大日本文明協会編、初出1911年、『世界女性学基礎文献集成（明治大正編）』（第8巻 婦人と経済）水田珠枝監修、ゆまに書房、2001年、23頁。
- 77 同注66、金仲華。
- 78 原文「現在介紹這本書更希望婦女讀者能認識這時機的重要、努力將職業的範圍擴展推廣起來、努力將獨立的基礎樹立穩固起來」同注66、金仲華。
- 79 例えば、陳碧雲がギルマンは女性の職業を主張し、女性の知力の發展を尊重するが、それが完全に資本主義的な自由競争説であるとギルマンの思想を批判した。陳碧雲、『婦女問題討論集』、中華基督教女青年会全国協会、1935年、3頁。
- 80 『東方雜誌』の「婦女と家庭」欄について情報が非常に少ない、この特集欄について筆者には1932年から1937年まで不定期刊行され、全部で153篇の記事があったことと判明した。商務印書館が20世紀前半に発行した『東方雜誌』（1904年～1948年）も45年間にわたって刊行を続け、近代中国史上最大の総合雑誌として注目を集めている。同注21、7頁。
- 81 陳延媛、「女性に語りかける雑誌、女性を語りあう雑誌—『婦女雑誌』一七略史」、村田雄二郎編、『「婦女雑誌」からみる近代中国女性』、2005年、研文出版、47頁。
- 82 原文「經濟的困蹶、建設的荒廢、文化的衰落、每個有感覺的人都能體會到這種現象的危機。就是把生活消磨在家務中的婦女、也能感到這種影響的襲擊…幾年來曾經有人主張婦女要回到家庭中做一個治家的賢母良妻也曾經有人較前更熱烈的主張婦女要大規模地參加社會生活同樣有人主張婦女應積極的參加政治進行家庭社會政治還有其他許多標出着的路中國婦女要向那一條去呢」、仲華、「中國婦女往何處去」、『東方雜誌』第30卷第1号、1933年1月1日。
- 83 同注82、仲華。
- 84 〔表2〕に示されたタイトルの「我国婦女知識解放運動的檢視」についてであるが、初出掲載誌は現時点で不明である。筆者がそれは金仲華が『婦女問題的各方面』を発表するために、書かれた新しい文章であると推測している。
- 85 同注22、孟如。
- 86 原文「（一）企圖驅使婦女重返於家庭者是抱著怎樣的動機？（二）婦女在目前的職業界占有怎樣的地位？」

同注22、孟如。

87 同注25、陳、247頁。

88 職場できれいに化粧し、人の注意を惹くけれども仕事の能力がない女性職員に対する蔑称である。

89 原文「我的辭去『婦女與家庭欄』的事務、一半是因爲別的職務太忙、一半也因爲覺得對於婦女問題、所有應說的話都已說過了」金仲華、『婦女問題的各方面』、開明書店、1934年9月、2頁。

90 原文「最先我把婦女問題作為單獨屬於婦女一性的問題來看，後來我總算認識了這是屬於許多社會問題中的一個問題。」、同注89、金仲華、2頁。

91 同注46、鄭、67頁。

92 霜木、「国際問題專家金仲華」、『今日浙江』、中共浙江省委、2003年、45頁。

93 何瑋、「1920年代中国社会における『新婦女』—『婦女雜誌』を主なテキストとして」、『ジェンダー研究』(7)、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、2004年、55頁。

94 雲舫、「新婦女所應鏟除外的幾種劣根性」、『婦女雜誌』第6卷第9号、1920年9月。

